

様 式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

科学研究費助成事業

研究成果報告書



平成 29 年 6 月 13 日現在

機関番号：32601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2016

課題番号：25871215

研究課題名(和文) 池大雅作品にみる室町文化憧憬の探究：水墨表現を中心に

研究課題名(英文) A Study on Ike Taiga's Ink Paintings; Exploring Taiga's Adoration for the Muromachi Culture

研究代表者

出光 佐千子 (IDEMITSU, Sachiko)

青山学院大学・文学部・准教授

研究者番号：90462902

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000 円

研究成果の概要(和文)：池大雅(1723-1776)が室町時代的水墨画に倣って描いたと思われる作品を対象に、水墨表現と画賛を分析し、「本歌」とされた作品を明らかにした。美術史の分野においては、日本の文人画は中国への憧憬によって生み出されてきたという歴史観が根強く、中国絵画からの影響分析が研究の中心であった。

しかし、本研究により、如拙、周文、雪舟など中世水墨画史の主流、またはそれを継承する光悦、白隠等の水墨画が、40代に完成をみた大雅様式を変革する動機となったことが確認できた。日本の文人画家が憧憬した「中国」の基層に、室町文化というブランドを見出せたことは、今後日本の文人画家の精神性を捉え直す良材となるだろう。

研究成果の概要(英文)：Focusing on the Muromachi period ink paintings Ike Taiga (1723-1776) copied and studied, the research aimed to clarify the original sources of the inscriptions given on the paintings as well as the expression style of the paintings themselves. In Japanese art history, it has been generally understood that Japanese literati painting developed out of admiration towards China. With this view, the Japanese ink painting study tended to focus on the influence from Chinese painting.

Through this research, it has become clear that the works of major medieval Japanese ink painting artists, such as Josetsu, Shubun, Sesshu and their successors including Koetsu and Hakuin, provided the breakthrough in Taiga's painting style leading to its maturity in his forties. The Muromachi-period Japanese ink paintings were another major source of influence and was brand-like in importance. The discovery points out to the need for reconsideration in future studies of mentality of Japanese literati painters.

研究分野：美術史

キーワード：文人画 室町文化 池大雅 水墨表現 画賛 中世水墨画 版画 パトロン

1. 研究開始当初の背景

美術史の分野においては、日本の文人画は、黄檗宗の渡来と共に流入した中国・明清文化への強い憧憬によって育まれてきたという歴史観が確立されている。そのため、明清絵画や舶載された絵入り版本からの造形的な影響の分析が、日本文人画研究および展覧会の主流となってきた(展覧会『中国憧憬 - 日本美術の秘密を探れ - 』、町田市立国際版画美術館、2007 年)。

申請者も、1990 年代の武田光一氏による画譜研究(武田光一「池大雅における画譜による制作」『美術研究』348、1990 年)を出発点とし、2000 年に入ると池澤一郎氏ら日本近世文学の研究者による画賛研究から着想して、池大雅の中国名勝図について、作品図様と画賛の典拠を絵入り版本等の漢籍に探究してきた(拙稿「池大雅筆『餘杭幽勝図屏風』 - 景観表現の意味および形態の源泉」『美術史』153 号、2002 年)。また、吉田恵理氏による研究(吉田恵理「池大雅筆「洞庭赤壁図巻」の表現と賞翫の場」『美術史』155 号、2003 年)に触発され、作品のイメージソースとなった中国版本に親しみ、その知識を共有した詩文結社等による大雅作品の鑑賞の場を明らかにしてきた。(拙稿「池大雅筆『西湖春景・錢塘觀潮図屏風』の主題考察 - 図様と文学的典拠を探る」『MUSEUM』599、2005 年)。

しかしながら一方で、大雅が生涯にわたって取り組んだ題材である「真景」(実景)の概念を考察するうちに、日本の実景を描いた「真景図」の中に、「雪舟渡唐の富士」として知られる「富士三保清見寺図」(永青文庫所蔵)の図様を踏まえた大雅作品など(拙稿「池大雅筆「松蔭觀潮・夏雲靈峰圖」屏風の主題再考察」『國華』1354、2008 年)、室町水墨画を連想する優品が多く見られることに問題意識を持つようになった。

そのような中で、野口剛氏が、池大雅筆「柳下童子図屏風」の落款「擬如拙道人筆」における「擬」の意味を同時代の画壇の状況に照らして考察され、18 世紀中期における室町水墨画の役割について検証する重要性を示されたことが、申請者が本研究を開始する直接的なきっかけとなった。(野口剛氏「《如拙道人の筆に擬す》とはこれ如何 - 池大雅筆「柳下童子図屏風」序説」『美術史家大いに笑う - 河野元昭先生のための日本美術論集 - 』、ブリュッケ、2006 年)。

じつは大雅作品における室町水墨画の影響については、早くも 1960 年代初頭に吉澤忠氏が 27 歳の「赤壁両遊図屏風」に周文の構図を、43 歳の「日本十

二景」の焦墨表現に雪舟の影響を認められている。しかしながら、吉澤氏は、日本文人画の「雑食性」を特徴づける北宗画表現のひとつとして、大雅作品のうちに室町時代の漢画系水墨画に似た表現を見出したことに留まっており、申請者による研究開始の当初、大雅が評価した室町水墨画の具体像については吉澤氏以後、ほとんど研究がすすんでいない状況であった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、池大雅が憧憬した「中国」の基層に、江戸時代には既に古典として人々の間に浸透していた室町水墨画のイメージを見出すことである。また、それによって、中国趣味一辺倒に考えられがちな文人画家たちの制作姿勢を見直し、日本文人画の「大成者」としての大雅の作画思想を再検討するものである。

具体的には、大雅の作品上に表された水墨表現と画賛を、本歌となった室町水墨画と詳細に比較検討し、いつ頃から、どのような意図を持って、誰に向けて、室町水墨画を連想する作品を制作したのかを明らかにすることを目指す。

3. 研究の方法

以下の方法により、大雅作品における室町水墨画の影響を調査整理した。(4)に関しては、特に大雅が参禅した白隠慧鶴(1686 - 1769)の弟子たちや彼らを通じて大雅に絵を注文した素封家の絵画コレクションの悉皆調査により、禅宗社会に受け継がれた室町文化の伝統の中で、大雅に期待された趣向を浮き彫りにする。

- (1)大雅作品における「本歌」の検証
- (2)大雅による翻案方法の分析
(水墨表現と画賛の内容を中心に)
- (3)大雅作品における雪舟様の分析
- (4)白隠ゆかりの素封家・寺院コレクションの悉皆調査(植松家・徳源寺・自性寺。調査にあたっては、岡田秀之氏(嵯峨嵐山日本美術研究所)吉田恵理氏(静岡市美術館)宗像晋作氏(大分県立美術館)ら文人画研究者の協力を賜った。)

4. 研究成果

本研究で特に力を注いだ3.(1)の「本歌」の検証については、そのほとんどが如拙、周文、雪舟ら中世水墨画史の主流をなす巨匠の作品に求められた。またその一方で、光悦、白隠ら中世水墨画の伝統を継承する近世書画についても大雅の高い評価が浮き彫りとなった。

その代表格とされる「嵐峽泛查図屏風」(個人所蔵)については、「擬光悦」落款のあることから、「溪流花木図屏風」(メトロポリタン美術館所蔵)等、光悦筆と伝承されてきた可能性のある屏風絵との関連性が囁かれてきたが、本研究で改めて画面を詳細に観察した結果、風に煽られた松の枝のすらりとした描線が、そのまま呼吸を均しくしながら、緩やかに溪流の曲線へと変化してゆく等の描法に、光悦の書風に通じる流麗な連綿体を取り入れていると考えるのが妥当ではないかという考察に至った。

また、落款に明記されていないが、室町水墨画の名画を連想させる大雅作品として、伝雪舟筆「富士三保清見寺図」(永青文庫所蔵)を踏まえた「松蔭觀潮・夏雲靈峰圖屏風」(八雲本陣記念財団所蔵)の他に、新たに「王逸少為老嫗書扇図」(京都文化博物館所蔵)「指墨寒山拾得図」(個人所蔵)「淵明愛菊図」(出光美術館所蔵)等が見出された。それぞれ五山の学僧たちの間で鍾愛された如拙筆「王羲之書扇図」(京都国立博物館所蔵、重要文化財)周文筆「寒山拾得図」(東京国立博物館所蔵)周文筆「陶淵明賞菊図」(梅澤記念館所蔵、重要文化財)等、大雅作品の先例が確認できた。いずれも、江戸時代に既に人口に膾炙していた室町水墨画の構図を借りて、表現においては米法山水などの中国絵画様式や、中国文人たちが親しんだ指頭画(指墨)によって表すといった手法が見られた。

研究の方法(2)の大雅が「本歌」とした作品と大雅作品との関係性については、従来の研究では、大雅による主題の翻案に注目が集まり、両者の間で画風的に似ているところがない点が通説となっている。最近では、むしろ両者の表現の落差にこそ大雅の力量をみるという積極的な評価さえなされているが、申請者は、特に大雅が落款で「擬(作家名)」と謳っている作品に限っては、「本歌」とした作家の筆意、筆法も単純に軽視すべきではないと感じていた。そこで、水墨表現を詳細に比較検討し、主題だけではなく、表現上からも「本歌」の筆法に倣っている点を確認して、大雅作品の制作背景を改めて考察した。

この考察の中で特に新知見が得られたのは、「擬如拙道人筆」の落款があり、如拙筆「瓢鮎図」(退蔵院所蔵、国宝)を踏まえた「柳下童子図屏風」(京都府所蔵、重要文化財)についてである。「柳下童子図屏風」を特徴づける川面に映る柳や笹の影などの自

然の移ろいの描写は、南宋院体画の「边角の景」や減筆法の伝統をひく「瓢鮎図」とは、対極を目指しているかのように見える。しかし、柳の幹や木橋などの画面を構成する中心的なモチーフに注目すれば、太い二本の墨線だけで量感や質感が表され、略筆による線の妙味が如拙の減筆法に通じる重要な要素となっていることが観察できた。

また、その禅画を思わせる水墨表現が大雅によるもう一つの「瓢鮎図」(出光美術館所蔵)と極めて近いことから、「瓢鮎図」の賛者である相国寺の大典顕常との交流が、「柳下童子図屏風」の制作の動機となった可能性を指摘した。さらに、その根拠のひとつとして、「瓢鮎図」の賛で大典顕常が示した「不至之指」(『莊子』)という禅的な命題が、「柳下童子図屏風」の中で水に手を入れる子どもの指先の表現として絵画化されている可能性を挙げた。「瓢鮎図」が持つ禅の本来的な命題を、江戸時代の知識人たちの間の共通語であった『莊子』の中に探し、視覚的に身近な題材へと飛躍させた背景に、禅宗社会で室町文化の伝統を深く理解していた大典の存在を推察した。

研究の方法(3)の、大雅作品における雪舟様の展開の検証については、吉澤忠氏が四十代に一度完成をみた大雅様式をうち破った作品として重視されている43歳の「日本十二景図」(個人所蔵)の「松島図」を改めて調査し、この頃から雪舟風の楷体描の描線が重んじられてくることを検証した。一方で、玉澗風の草体描作品として珍しい「傲雪村山水図屏風」(京都国立博物館所蔵)を取りあげ、雪村の描線を模倣しながらも、その表現はうねるような描線の創り出す量感にあり、雪村とは表現の意図が異なることを指摘した。旅を好んで山水に「真」を求めた大雅にとっては、雪舟の「潑墨」表現に代表される草体描よりも、楷体描の気迫に溢れた描線が必要とされたのではないだろうかという結論に至った。さらに、この楷体描の描線が48歳頃の「十二月離合山水図屏風」(出光美術館所蔵、重要文化財)に謹直な線の集積として登場してくることに注目し、雪舟様の集大成のような本屏風に発注者である信州・上田の素封家の趣向が反映されている可能性を指摘した。

研究の方法(2)と(3)の成果の一部は2016年刊行の『出光美術館研究紀要』21号に「池大雅における室町文化憧憬の一樣相」と題して執筆した。

ところで、研究の方法(2)の研究成果でも触れたが、大雅を室町水墨画に親近させた背景に禅宗があったことも重要な視点であった。そこで、研究の方法(4)では、白隠傘下の斯経が滞留した駿河の原宿の植松家、植松家の菩提寺である原宿の徳源寺、白隠傘下の提州が住職であった大分県中津の自性寺の絵画コレクションを悉皆調査した。

植松家の大雅は博物館に寄託となってお

り、また中世書画に関しては一休の書一幅以外に特筆すべきものがなかったものの、植松家には円山応挙の画稿の他、岸派、江戸時代後期から植松家を訪問した画家、書家、歌人による画帖（「搦錦帖」）等の膨大な資料が残されている。これらのデータベースは作成中であり、完成した暁には、斯経の斡旋で大雅に発注した植松家六代当主・蘭溪の嗜好の全体像が明らかになることが期待される。

また、自性寺については提州の発願によって成った書院・大雅堂に貼り付けられた47面の大雅筆襖絵を調査した。そして、貼り付けられた幅広い様式の書画から大雅の白隠様式ともいえる太く雄渾な書風のみを選出し、書（漢詩）と画の主題を合わせることで大雅が構想した書院空間の再現を試みた。その結果、上の間は、懷友の心情が詠じられた劉滄・鄭谷・李白の詩と対になる絵画が貼られ、後を山に、前を江に挟まれた甘露寺の楼閣からの絶景を眺めるように、左右に江（洞庭湖）と山（鳴皇山）の風光明媚な光景が対峙していた構想だったのではないだろうかという推論に至った。自性寺の襖貼付については、大雅の画業を一貫する様式とは異なる様式が混在し、制作年代や状況の解明が困難であったが、本研究では白隠風の書画を中心に整理し直すことで、書院空間に込められた懷友・提州への想いが新たに浮き彫りになった。自性寺についての調査研究の成果は、2016年11月の表象文化研究会（於青山学院大学）において発表を行った。

本研究によって、大雅に直接的に影響を与えた版本等に見られる室町水墨画を具体的に明らかにすることはできなかった。しかし、大雅作品における「本歌」を探究することによって、主に40代以降に如拙、雪舟、光悦、白隠といった巨匠に画風を擬えることで、大雅自らの画風のレパートリーを広げていったことが明らかとなった。その背景に、大典や白隠を通じた禅宗の学僧たちとの交流や、雪舟風を嗜好した地方の素封家たちの意向があったと考えられる。日本の文人画家が憧れた「中国」は、室町水墨画のブランドが放ち続けていた光のもとに集められた中国趣味であったことの一端を見いだせた。

最後に、室町時代と江戸時代を結ぶ、この研究過程で新たに浮上した課題として、「銭塘観潮図」等、五山僧らの間で流行した中国絵画の主題でありながら、狩野派、雲谷派など室町以降の漢画系諸派に受け継がれなかったものについてである。これらの主題に対しても、大雅は図譜などから得た新しい図様を用いて挑戦しているため、作画の動機についても今後の研究課題として掲げていきたいと考えている。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

出光佐千子、池大雅における室町文化憧憬の
一様相、出光美術館研究紀要、査読無、21号、
2016年、45 - 68

〔学会発表〕（計1件）

出光佐千子、自性寺大雅堂障壁画について、
表象文化研究会、2016年11月27日、青山学
院大学（東京都・渋谷区）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

出光 佐千子（IDEMITSU, Sachiko）

青山学院大学・文学部・准教授

研究者番号：90462902